

## 「ニュータウンの人類学」の可能性

西川祐子・杉本星子・森 正美

### 1. はじめに

共同研究「ニュータウンにおけるジェンダー変容」は、文部科学省の科学研究費〔基盤研究（C）（2）、平成13年度～15年度、研究機関名：京都文教大学、研究代表者：西川祐子、研究分担者：遠藤央、杉本星子、鶴飼正樹、森正美（以上、京都文教大学）、豊田洋一（中部大学）、篠原聡子（日本女子大学）〕から補助金をうけて、ニュータウン研究3年計画に着手し、現在、2年目の終わりにいる。当初の予定どおり、前半は全国の主なニュータウンの見学と調査を行った。後半に予定していた本校に隣接する榎島グリーンタウン、向島ニュータウンの調査がようやく軌道に乗ったところで、これまでの調査結果をまとめ、後半の見通し、およびそのさらに先の計画をたてるために、ここに中間報告を行いたい。

まず、なぜニュータウンをテーマにとりあげるのか、について述べておく必要がある。私たちは、現在、社会問題として大きくとりあげられ始めている高齢化、少子化、階層分離、そして多文化社会化といったいわゆる郊外問題あるいはニュータウン諸問題の根底に横たわるジェンダー変容に注目して、共同研究を始めた。ニュータウンは、専業主婦がいることを前提とし、「家庭」家族の居住目的のために計画、建設された計画都市である。当初、夫は会社、妻は家庭という分業が徹底していたため、ニュータウンの昼間人口は女性と子どもに

偏っていた。だが、家族扶養賃金と終身雇用を前提とした賃金体系が崩れつつあり、就労しない主婦が現実には少数派になりつつある現在、家庭内だけでなく社会的な性別役割分業も変化している。経済の高度成長期を支えた世代が定年退職期にはいり、ニュータウンの全日住人の男性割合が増えていることもまた、ベッドタウンの目的と機能を変化させずにはいない。目的にそって、あまりにも機能的に整然とつくられた住まいと街、つまり生活の容器と、容器の中身とのあいだにずれが生じている。ニュータウンでは性別分業の前提が変わることにより、人間関係の根底的な変化が起こりつつある。

個室<住戸<街区<ニュータウン<地方行政体<国家、とレベルごとに分別され、入れ子式、あるいは包括的な全体組織の基礎単位であった「家庭」家族のなかに起こりつつあるジェンダー変容は、社会全体をも変化させる可能性を持ちはじめている。家族のありようの変化は、私的領域の変化にとどまることなく、私的領域／公的領域の境界を移動させ、上からの包括的アイデンティティを崩す。そこでは、多層的で多元的な所属意識をもち、組織内に包括されて生きるのではなく、みずからの身体と人生に責任をもち、多方面にむすぶネットワークを形成しながら生きる人の数が増えている。整然と分別され、もっとも組織的に構成されているように見えるニュータウンの水面下でおこっている変化には、ニュータウンの将来だけではなく、社会全体の変

化を占うものがあると予想される。私たちは現在、本共同研究テーマの射程が、私たちが当初に考えた以上に遙か遠くに及ぶことに気付きはじめたところである。

この共同研究はまた、方法論の上でも、新しい課題をかかえている。私たちの共同研究は、文化人類学、社会学、ジェンダー研究、住居学、都市計画の専門家が集まった学際的な研究会である。これまでの期間内にフィールド調査や報告会、研究会をかきねて理論および方法を異にする学問領域のあいだの交流期間を十分にとることができた。同じフィールドに同時に立ち、同じ事象を観察し、共に調査をしながらも、討論のたびに、互いの切り口のちがいが新鮮である。情報交換をするうちに、共同使用の目的で作りはじめたデータベースの量が増え、それぞれの個別論文のなかに、他の研究分担者の論文を引用する機会も多くなり、相互理解が深まってきた。

この共同研究は多領域からの参加が特徴であるが、なかでも文化人類学は今まで、遠くにある異文化ではなく、自分たちの足元の社会であるニュータウンの研究に参入する機会が少なかった。文化人類学的調査は、ニュータウン研究に対しどのような新しい貢献ができるだろうか。また文化人類学にとってニュータウンという新しいフィールドはどのような意味をもつか。ニュータウン研究にとっても、文化人類学にとっても、「ニュータウンの人類学」の可能性について、ここで整理しておく必要があるであろう。

以下、第2章「戦後史とニュータウン」では先ず、戦後日本の住宅政策全体のなかでニュータウンはどのように企画され、実現されたか、を見ておく。私たちがこの1年半のあいだに見学した全国各地のニュータウンの時間的空間的位置づけをすることが、この章の目的である。

第3章「新中間層のための新都市：松戸常盤平団地」においては、1950年代から計

画が始まった首都圏の新都市建設計画の記録を分析し、現状を報告する。第4章「移住から定住へ：高蔵寺ニュータウン」では、1960年代以降の高度経済成長期に急激にふくらんだ都市人口を収容し、都市近郊に定住させるために公団主体で企画されたニュータウンの30年後を取材している。第5章「未来に挑むニュータウン：幕張パティオス、東雲キャナルコート」は、多様化から個性化へと向かう近未来都市のデザインと住人ネットワークのフィールド調査である。以上のような日本各地のニュータウン調査に文化人類学の視点と方法を持ち込むことにより明確になってきたのが、日本型ニュータウンの特色とその問題であった。第6章「日本型ニュータウン」の現在」では、日本のニュータウンが抱える普遍的問題を整理し、本共同研究の今後の方向性と可能性について述べる。

なお、本共同研究では、入居40周年をむかえ、リニューアルと建て替え問題にとりくんでいる千里ニュータウンの見学も行った。その調査報告は、同調査でお世話になった豊中市政研究所発行の『TOYONAKAビジョン22』vol.5, 特集「ニュータウン解体新書」に、西川祐子「ニュータウンのジェンダー変容」としてすでに発表されている。

## 2. 戦後史とニュータウン

「ニュータウン」という用語が一般に用いられるようになるのは、戦後の焼け跡の復興が終わり、経済が高度成長期に入った後のことである。都市の激減した人口が戦前レベルに復活し、ひきつづき都市内部に収容不可能なほど膨れあがった事態を解決するための処置として、ニュータウンが構想された。ニュータウンの定義としては、福原正弘による「ニュータウンはいくつかの公的機関によって計画的に開発された、人口5万人程度の住宅地を中心にした街」

(福原 2001) が妥当であろう。ここでは人口5万人程度とされているが、実際には3万人前後のニュータウンも数多い。「住宅地」とあるように、旧来の大都市や中核都市に通勤するサラリーマンのベッドタウンとして計画されたのが、日本型ニュータウンの特徴であった。この章では、戦後日本の住宅政策を整理し、私たちがこの1年半のあいだに見学した列島の代表的なニュータウンそれぞれの位置づけを行う。

1945年11月に設置された戦災復興院は、全国の戦災都市数は120、消失面積は5万4千ヘクタール、戦争による住宅不足数は420万戸と発表した(大坪・吉田 1998)。住宅不足数は、焼失、家屋疎開、資材不足、海外の旧植民地からの引き揚げ人員の収容などをどう加算するか、逆に住人の戦死、病死、罹災死により不要になった住戸の数、崩壊した世帯数をどう差し引くか、によって総数が上下し、450万戸という計算もあれば、後にのべる西山外三のように、これを500万戸と算出する説もあった。

政府はすでに同年8月に住宅300万戸を建設する5カ年計画に言及してはいるものの、住宅問題よりも食糧問題がより緊急の対策を必要とする状況にあった。戦前の同潤会をひきついで1941年から公営住宅の建設にあたった住宅営団は、GHQにより戦争中の国策協力団体と判定され、1946年には、閉鎖された。

焼け跡にあって、戦後復興は建築用語を用いた比喻で語られることが多かった。軍事国家にかわる文化国家としての「再建」の基礎には、良き家庭の「建設」が必要であり、そのためには家庭の入れ物である住宅も一新されなくてはならない、といった類の言説が流布した。建築資材がないにもかかわらず、設計図入りの「住まい」建設のハウツー本がブームであった。

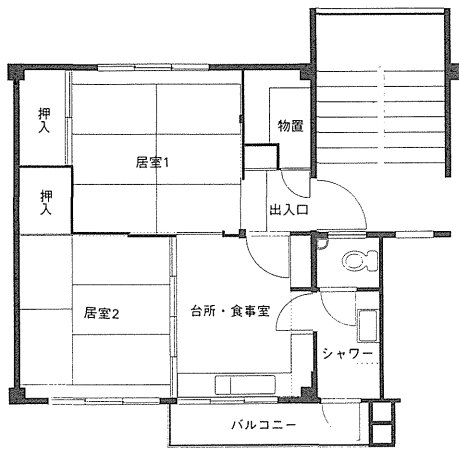
戦後住宅理論を代表した西山外三『これからのすまい』(西山1947)は、大きくても建具をとりはらえば一つの空間となって

家長の視線の下におかれた「封建住宅」を批判し、特権階級の住居ではなく、機能本位の人民の住まいの設計を提案した。だが、ここには理論の一種のねじれがあった。西山はかつて住宅営団の技師であった。住宅営団は総力戦を担う重工業の職工の労働力再生産を合理的に行うため、戦時下規格の家族用最小限住宅の設計した。戦時下において練られた、西山の国民住居の理論が戦後ただちに人民のための住まいの理論に適用されたのであった。西山は「国民住宅」と「国民住居」を区別しようとしたが、実際には両方の用語を用いている。(西川 1999: 248-264)

日本だけでなく、すべての国民国家は、国民住宅(居)の理論を必要とし、住宅政策をたてる。一室住宅を批判した西山理論のキーワードは「分離」であり、「寝食分離」と「分離就寝」(親たちと子どもの、ついで子どもの性別による寝室の別)の理論であった。西山の戦後理論の特徴は夫婦の寝室の確保をとくに強調したことであった。彼は戦後復興院が発表した数字を上回る500万戸の住宅建設の必要を主張した。1つの住宅に1組の夫婦という原則をたて、小家族の数が増える分については、一戸の床面積の縮小と高層集合住宅の建設により、社会全体としての住宅コストを下げるという解決が述べられている。

西山理論は51C型と呼ばれる公営住宅設計(図1)にも、1955年に発足する日本住宅公団初期の2DK設計にも大きな影響を与えた。なお、西山の本の付録につけられた「復興建設住宅の建設基準案」(1946年4月)には、挿絵入りで「将来の都市住宅は、ゴミゴミした低層のイエから明るい光、新鮮な空気につつまれた高層住宅へ」、「快適・健康・安全・静ケサ・光・空気・緑・充分な機械設備・共同施設」とが書かれている(資料1)。1946年に描かれたこの絵は先進的であったにちがいない。そのままのちの大規模団地住宅群のスケッチのよう

図1 公営51C型標準設計  
(図説 日本の「間取り」2001:98)



資料1 復興建設住宅の建設基準案  
(西山 1947 付録)

## 将来の都市住宅は……

ゴミゴミした低層のイエから



明るい光・新鮮な空気につつまれた



であり、もっと後のニュータウン風景の一部かと思ふばかりである。すべての建物と住戸が標準設計で統一されている印象があるところに、労働者のための人民住宅の印象がつよい。

戦後の各国の国民住宅は高層集合住宅になり、互いに似通うが、社会主義国と資本主義国の相違はあった。生活の最低基準を平等に保障するのか、競争原理を反映して高低のある差異化がはかれるか、の違いである。その中間のいわゆる福祉国家の住宅政策にも、それぞれの社会に特有の型がみられる。焼け跡からの復興を目指した日本の復興住宅は、最小限基準による統一設計、賃貸本位の建設の期間が長くつづいた。だが一方では、すでに1950年には、日本住宅公団法に先だって住宅金融公庫法が公布施行されていた。その後、政府は公営の賃貸住宅の建設から、しだいに持ち家奨励政策へと転換してゆく。賃貸から分譲、つまり借家から持ち家へが、戦後の住宅政策の大筋であり、庭付き一戸建てを上がりとする住宅双六が組み込まれたニュータウン建設は、戦後の住宅政策の総括として登場した。

1955年、鳩山一郎第二次内閣の時代に発足した日本住宅公団は、不燃性、団地方式、DK型の賃貸および分譲住宅の大量生産にのりだした。戦後の「家庭」家族の容器モデルは2DKであった。初期の公団住宅2DK設計は、現在、松戸市立博物館に再現、展示されている。

この年、建設省は全国の住宅不足は270.8万戸と発表、目標480万戸の住宅建設10カ年計画を始めた。この計画実現のために、公団住宅の大量建設が期待されたことは言うまでもない。同じ年に住宅金融公庫は中高層耐火アパートへの貸し付けを開始した。ちなみに、住宅公団第1号の大阪府堺市金岡団地の入居資格月収は、大卒の新任給料平均が1万2千円の時代に、2万5千円であった。

1958年には公庫住宅が50万戸を突破、100万人の団地族が生まれたともいわれた。国民生活白書はこの時点で「住宅はまだ戦後である」と述べている。同年、公団大規模団地第1号であった香里団地が入居開始、翌1959年には関東で最大規模の公団ひばりヶ丘団地が完成した。10万坪、2700戸であったが、これらはまだ「ニュータウン」とは呼ばれていない。1960年に入居開始の千葉県松戸市常盤平のパムフレットには、日本語で「新都市」、英文で「TOKIWA-DAIRA NEW TOWN」と記されている。

ニュータウン建設を促進するため、住宅地の大量かつ計画的供給を目的とした新住宅市街地開発法が、1963年に公布されている。すでに1958年には大阪府の施策として千里ニュータウン開発が決定されていた。愛知県の高蔵寺ニュータウン開発は1960年に住宅公団総裁決定が下され、翌年東京大学高山研究室に住宅地開発プランの策定が依頼された。1964年には多摩ニュータウンの開発が決定された。いずれも高度経済成長期に都市に集中する人口を収容する大都市依存型のベッドタウン構想であった。

この年に住宅公団は、全国統一の63型標準設計を発表している。さらに同年、建設省は1970年までに1世帯1住宅を実現するという計画を発表した。他方、1960年すぎから民間住宅会社によるマンション建設ブームがはじまっていたが、まだ都心の高級マンションに限られていた。そして1966年あたりから、住宅ローンの普及でマイホーム・ブームがはじまった。マンション建設も盛んになった。全都道府県で住宅数が世帯数を上回ったのは、1973年であった。1世帯1住戸は焼け跡からの復興の悲願の達成であった。次の目標は1人1部屋とされ、ここから部屋の時代が幕を開けた。

ニュータウンはさまざまな公的機関が相互乗り入れをして、大都市のベッドタウンを建設する原則である。しかし愛知県の高蔵寺ニュータウン建設は住宅公団が主体で、

それだけに公団に蓄積された理論と技術を駆使して構想された。「2DKからニュータウンへ」という標語には、公団賃貸住宅のほとんどが2DK設計であったことをふまえ、通過地点としてではなく永住の地としてのニュータウンを作ろう、という意気込みがみられる。同時に高蔵寺ニュータウン計画には賃貸から分譲へ、最終目標は庭付き一戸建て住宅というコースが組み込まれていた。一戸建て住宅の分譲地は1区画が100坪という広さであった。住宅は生涯賃金の大きな部分を占める買い物である。夢の実現により、そして現実にはローンの支払いによって、国民は労働と家庭につながり止められる結果ともなる。

さまざまな年表（筑波大学小場瀬研究室 1999、久武・戒能・若尾・吉田 1997、湯沢 1995）をつきあわせると、1975年が住宅事情と住宅政策の大きな転換の年であることがわかる。その転換は政府の方針転換というより、政府が住人の動向によって方針の変更をせまられる、という形をとるところに特徴がある。75年は団塊世代の結婚率がかつてない高率に達した。一組の夫婦の希望する子ども数と現実の数が2人となって、モデル的家族のあり方が身体化され内面化されたときえ見えた。1人1部屋原則が確立されると、家族の共用空間としてのリビングルームが必要となる。公団住宅の賃貸にも3LDKが出現、たちまち都市のマンションにもひろがった。以後、nLDKの「リビングのある家」が家族のための住居のモデル設計となり、大都市、中核都市だけでなく農村住宅の改造にまでその影響が及んだ。

さらに1976年には、ワンルームマンションという新しい住まいモデルの創出があった。ワンルームマンション第1号は「メゾン・ド・早稲田」である。両親の住む「リビングのある家」を実家と呼び、大学などの所在する都市の賃貸「ワンルーム」を仮の住まいとするという住まいの二重構造が

成立し、定着した。

1955年の設立以後、住宅の戦後政策の中心にあって、1世帯1住戸、1人1部屋を実現し、国民生活の向上に確実に貢献したとおもわれる日本住宅公団ではあるが、1975年前後には消費者から、公団住宅は都心を離れて「遠く」、もはや家族用には「狭く」、民間企業が建設したマンションにくらべて値段が「高い」という声が次第に上がり始めた。賃貸住宅にも分譲住宅にも入居者が殺到してくじ引きの倍率が高かった公団住宅であったのに、その頃には空き部屋現象が起こるようになった。

日本住宅公団は1981年には組織替えと名称変更をして、住宅・都市整備公団として再発足、さらに1999年には都市基盤整備公団となった。名称から「住宅」の2字がとれたことの意味するところは大きい。公団は住宅の大量生産という使命を終え、首都圏以外では新しい住まいの建設は民間企業にゆずり、都市整備とすでにある賃貸住宅の管理運営に活動を制限するに至ったのであった。

しかし、首都圏は例外であって、とくに私たちが2002年春に見学した幕張ベイタウンおよび東雲キャナルコートでは、公団が戦後50年のあいだに培った理論と技術の集約が問題提起型とさえおもわれる斬新な設計で表現され、コミュニティ形成のための数々の仕掛けも試みられていた。住人側は設計する側の問題提起をどう受け止め、どのような答えを返すのだろうか。

一方、ニュータウンは、30周年、40周年を迎えた90年代から、住む街としての成熟だけでなく、早すぎる老朽化が言われはじめた。1つのニュータウンの中でも、街区により着工や入居の時期が異なることは外観からもみてとれる。

リニューアルと建て替えは、建物のレベルにとどまらず人間関係の変化をひきおこす。計画都市の計画主体のなかに住人は存在しなかったが、建て替えには「戻り住

人」の発言を全く無視することはできない。中古住宅居住条件や改造条件の規制緩和、限られた条件のなかでの建て替えの話し合い、さらにはもめごとのなかから住人の発言をききとる可能性が増えつつある。計画→着工→入居→街としての成熟→老朽化→再生という経過をたどるニュータウンは、無機的な外観にもかかわらず、規格の枠組みから溶け出して生長する生命体である。ニュータウンを、設計図としてではなく生命体としてとらえるには、住人の声をききとることと、住人の視座を共有する努力が不可欠である。

以下の章では、各地のニュータウンの調査資料から、ニュータウン研究の着眼点を整理し、最終章においてまとめることにしたい。

### 3. 新中間層のための新都市：松戸常盤平団地

#### (1) 新中間層の新都市誕生

2002年5月12日午前、共同研究の一行は、昭和30年代の団地生活を再現した松戸市博物館を見学し、午後は時間をかけて松戸市常盤平団地を歩いた。

松戸市博物館では、学芸員の方々から松戸市常盤平団地の成り立ちについて説明をうけ、日本住宅公団が作成した初期の記録映画（日本語版、英語版）と団地入居者向けに団地生活の心得を説いた「団地への招待」という映像を見せていただいた。その後、常盤平団地の建設プロセスと農村生活改善運動の様子、2DK住戸の展示を見学した。公団が作成した映像からは、日本が戦後の復興から工業立国をめざして高度成長期へ向かおうとする時代の意気込みが伝わってきた。ひばりヶ丘団地を舞台に団地生活の心得を説明する映像は、登場人物の言葉遣いや物腰から、ダイニングキッチンのあるモダンな団地生活が人々の憧れであった当時の雰囲気やを彷彿とさせるものであ

った。2DKの団地住宅の展示では、カーペットを敷いて洋間にした居間、昭和30年代型のテレビ、冷蔵庫、洗濯機、ステレオ、トースターや電気釜などの電化製品、ビニールを張った椅子とセットのダイニングテーブルや応接セットといった家具や調度品に、メンバーたちは子供時代を懐かしく思い出し、話がはずんだ。

さて、常盤平団地は東京都心から約50分、新京成線常盤平駅から徒歩8分、五香駅から徒歩8分という距離にある。1955（昭和30）年に松戸市金ヶ作地区と五香地区の一部が、全国主要都市周辺300万坪の宅地開発事業の対象に選ばれ、農地や雑木林であった約51万2千坪が大都市東京のベッドタウンとして造成された。用地買収をめぐる地元農民の反対運動が起こり法廷闘争にまで発展したため、二階建てのテラスハウス主体とした当初の計画は放棄され、総戸数4839戸、4階建ての中層公団住宅170棟と、ショッピングセンター、集会所、病院、小学校などの施設の建設が進められた。入居開始は1960（昭和35）年である。住棟には、ダイニングキッチン、水洗トイレ、風呂桶に内釜が組み込まれたガス風呂、ダストシュート、シリンダー錠、非常ベルと当時最先端の設備がそろい、近代的な洋風の生活スタイルが提案された。

## （2）ニュータウンの成熟と建てかえ事業

駅から団地へ向かう街路には、桜やハナミズキなど通りごとに異なる街路樹が植えられている。樹木が大きく成長して落ち着いた街路は、「日本の道100選」や「新日本の街路樹100選」にも選ばれたという。駅前には大きなスーパーができたためか、ショッピングセンターは閑散としていた。

常盤平団地の間取りは、1DK、2DK、3K、3DKと小さい。老朽化も進み、建てかえ問題が検討されている。しかし街角には、「建てかえ反対闘争」、「家賃値上げ反対闘争」の看板が掲げられており、建て

かえに反対する住人の根強い運動があることがうかがわれた。私たちが団地内を歩いていると、自治会役員の方に声をかけられた。その方に団地内を案内していただきながら、お話をうかがうことができた。小さな砂場のある公園が点在し、集会所にはたくさんの部屋があった。今はひっそりしているが、かつて集会所ではさまざまな教室が開かれ賑わっていたという。

初期に建てられた中層住宅は、住棟間隔がゆったりと大きくとられ、すでに大木となった木々のうっそうと茂った緑に埋もれていた。住棟の前には住人によって丹精こめて育てられた花が美しく咲いていた。駐車場が足りないため工夫して区画整備をおこなった盛り土にまで綺麗に花が植えられている。団地内の花壇はまるで、ここに暮らす人々の生活の歴史と、団地への愛着と誇りを象徴するかのようであった。

後日、松戸常盤平団地自治会の管理するホームページがあることを知った。ホームページの内容は非常に充実しており、活発な自治会活動が展開されていることがよくわかる。ホームページによると、自治会結成時（1962年）には総人口が2万4千人で、20歳代と30歳代で45%を占めていた人口構成が、少子・高齢化により2002年3月31日現在では総人口が1万に減少し、高齢化率が23.2%に達している。入居当時65歳人口が皆無だったという団地では、当時30歳だった入居者がすでに70歳を過ぎている。住人自身にとっても、少子・高齢化は深刻な問題として受け止められている。このように情報発信力を持つ自治会のような組織が存在することは、ニュータウンの一つの成熟の形を示している。そして、その組織が取り組む多様な問題と問題解決の努力から、私たちが学ぶことは多い。

#### 4. 移住から定住へ：高蔵寺ニュータウン

##### (1) 「緑と太陽の街」計画

高蔵寺ニュータウンでは、街路樹が大きく育ち、豊かな緑は紅葉の季節を迎えていた。2001年11月10日、私たちは共同研究メンバーであり、高蔵寺ニュータウンの住人でもある豊田洋一氏の案内で高蔵寺ニュータウンを見学した。30年という歴史と共に成長してきた景観からは、「殺伐とした郊外」という現代ニュータウンについて回るネガティブなイメージは、少なくとも外見上は、ここにはあてはまらない感じがした。ニュータウンの最寄り駅であるJR高蔵寺駅には、乗用車用昇降口が設置されていた。妻たちが、自宅から駅まで通勤や通学の家族をマイカーで送り迎えする姿が目につかんだ。

高蔵寺ニュータウンの全体像を把握するために、住宅公団の高蔵寺住宅管理センターを訪れた。もともとニュータウンの建設事務所として使用されていたというプレハブの建物に現場のにおいが残されていた。センター2階には、計画時や建設中の航空写真や初期模型が置かれていた。ニュータウン造成前の姿を知って驚いた。そこは木々に覆われた山だった。それが計画時の初期模型では、すでにまったく別の形状に造成されていた。山裾に円を描くように立ち並ぶ高層集合住宅棟の模型を目の当たりにして、「開発」という言葉の意味と、「計画」という言葉に込められた俯瞰的視点の存在が実感を伴うものになった。

総面積702.1haという高蔵寺ニュータウンは、名古屋圏で働く人々のベッドタウンとして1960（昭和35）年に計画が始まった。入居開始は1968（昭和43）年で、30年後の1998（平成10）年には、人口5万533人となっている。全体計画は公団主体であるが、公団賃貸、公団分譲、県営賃貸、公社分譲、

民間分譲など運営主体の異なる低層・中層・高層集合住宅、テラスハウス、戸建住宅などの多様な建築形態の建物が混在している。それは、個人が時間の流れの中で順を追って経験していく住宅双六のすべてのコマを一度に、展開図のように確認できるということを意味する。大型スーパー、専門店、文化・スポーツ施設や公共公益施設をニュータウンの中央部に集中させるタウンセンターシステムを採用しており、全体は藤山台、岩成台、高森台、中央台、高座台、石尾台、押沢台の7つの地区に分かれている。

##### (2) 世帯人員の減少－藤山台地区リニューアル住戸

私たちはまず、最も初期1968－70年に完成し「ニュータウン発祥の地」とよばれる藤山台地区の都市基盤整備公団のリニューアル事業のリニューアル住戸を見学した。中層住宅では3K（4.5畳×2、6畳1、K）を2DKあるいは洋室に改造し、高層住宅では2DK（4.5畳、6畳、DK）を使い方自由な1LDKか個室重視で洋室化を取り入れた2DKに改造する事業である（図2）。面積にすると概ね50㎡以下の空

図2 2DKから1LDKへの改造例  
（都市基盤整備公団中部支社 春日井市 藤山台団地パンフレット）

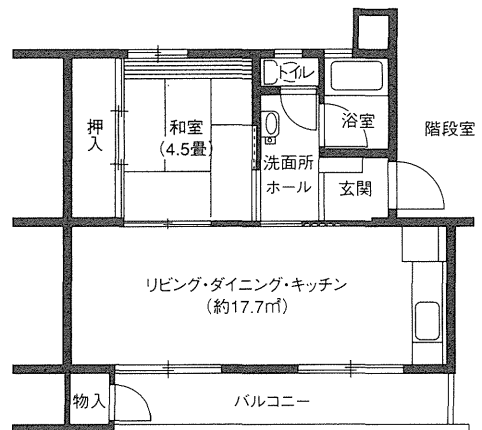
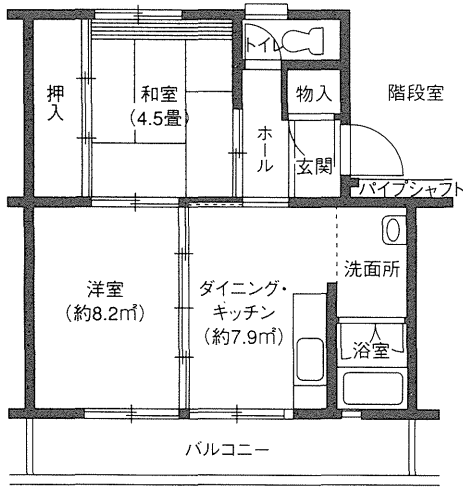




図3 洋室化を取り入れたバリアフリー化改造住宅例  
(都市基盤整備公団中部支社 春日井市 藤山台団地パンフレット)



間は、家族用というよりも単身居住に快適であるように見えた。同じく藤山台地区で、高齢者向け有料賃貸住戸へのリニューアル事業例(図3)も見学した。このリニューアルは、基本的に室内の段差をなくし、浴室やトイレに手すりを付けるバリアフリー化であった。

地区公園周辺にはほとんど人がおらず、ボランティアとおぼしき人々が公園の花壇にパンジーを植えていた。犬・猫飼育禁止の看板が大きく、その数も目立った。小さな商店街があるが、閉店の張り紙が目立つ。ベランダには、男性用の衣類とつなぎなどの作業着が干されているという家が何軒かある。男性の単身世帯の週末の洗濯物といったところだろうか。

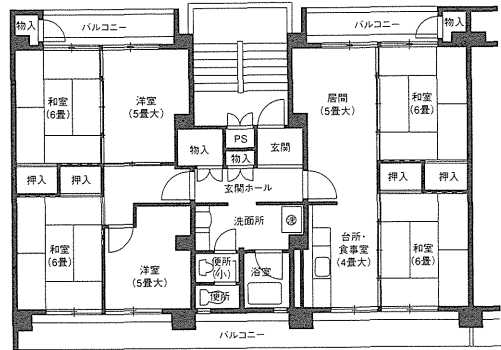
点在する児童公園には人影がまばらで、そのかわり通りがかりのゴミ置き場では、数人の子供が宝物探しをして遊んでいた。少子化が進み、鉄の扉の向こうの住戸内には、空間を区切って個室を確保しなければならないほどの世帯人員数があるとは存在しない。リニューアル住戸は、計画時の標準設計が、今では実態から遠くズレていることを顕わにしていた。

### (3) 量より質へー岩成台西団地2戸1改造住戸例

分譲用の5階建住棟ブロックと8階建および11階建住棟の賃貸ブロックが混在する岩成台西団地では、1984(昭和59)年という早い時期から2戸の住戸を1戸に改造する事業が行われている。そもそも岩成台西団地に賃貸ブロックが建設されたのは、住戸密度を上げるためだったが、「量より質へ」という住まいへの要求が変化する時期においては、2DKや2LDKの住宅は手狭で当初から一部入居のないまま放置されていた。改造では、従来2DK、2LDK、3DKなどであった隣接する2つの住戸あるいは上下階の2つの住戸を4LDK、5DK、6LDKなどの1戸に造り直している。

階段室を共有する2戸を1戸に改造した例(図4)では、一方の玄関を閉鎖し、隣接する壁をぶち抜いて、住戸内に防火用扉があった。2つあったバスルームの1つは、洗濯室を兼ねた広々とした洗面室に改造されている。さらに余裕空間が生じたためか、従来の公団の賃貸住宅ではみられない男性用小便器が復活していた。ただ100㎡という住戸面積のわりには、LDKが9畳とせまく、5畳の洋室が2室と6畳の和室が4

図4 3DKから6LDKへの2戸1改造例  
(都市基盤整備公団中部支社 春日井市 岩成台西団地パンフレット)



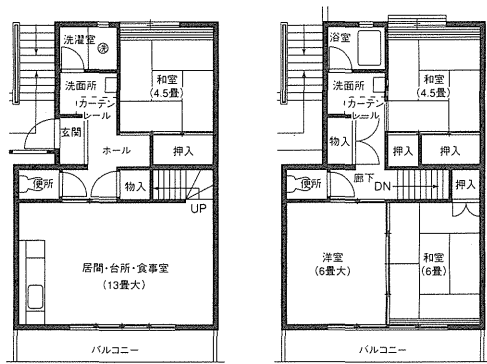
室と個室が多かった。

住棟1階の郵便受けの6LDK部分の表札には、4人家族（夫・妻、子供2人）の氏名が書かれている家が数軒見られた。使い勝手は不明だが、各自が個室を持っても余る生活が可能になる構成である。

学生などが共同生活をするなら、家賃を3万円ずつ負担して3人でのシェアも可能になるだろう。他人同士のシェアは前提ではないはずなので、住人イメージがつかめなかった。もし家庭内別居をするなら、浴室・トイレ・台所だけを共同使用し、あとは防火扉で閉ざされて分断された生活することも可能だ、という意見も出た。いったいどのような住人構成を想定しているのだろうか。

またエレベーターが停止する階の住戸を玄関にして、上下階の2戸を1戸に改造している住戸（図5）も見学した。押入れ空間が階段に改造されていた。階段の勾配はやや急だが、住戸空間内にある階段は隠れ家のように新鮮だった。階段の上がり口の和室の押入れは仏壇を納められるような造りになっていた。こちらの方は、下階のLDKが13畳と広く、上階にもトイレと洗面所が設置されているなど生活はしやすいのではないかという感想を抱いた。

図5 上下階を利用した2戸1改造例  
（都市基盤整備公団中部支社 春日井市 岩成台西団地パンフレット）



地区全体としては住棟間隔も広く樹木がよく育ち、圧迫感は感じられない。ただ人影は少なく、住棟1階に設けられたピロティのシャッターが下りたままになっているなど活気はなかった。

#### （4）田園都市の理想—石尾台戸建住宅

ニュータウンに隣接する中部大学で昼食をとり、キャンパスの広さに郊外立地の大学の特徴を感じた。その後、高蔵寺ニュータウンの計画に公団の立場から中心的に携わった津端修一氏の石尾台の自宅を訪れた。300坪の敷地には、津端氏が公団に入る前に勤めていたアントニー・レイモンドのアトリエ風の自宅があり、津端修一・英子夫妻が提案する現代都市の田舎暮らしを実践するクライנגルテンで果樹や野菜が作られている。作物の種類、作付けや収穫の時期、肥料の完成予定時期などが示された手書きのプレートが可愛らしく配列され、きちんとシステム化されていた。

自宅内には、寝室、リビング、ダイニング、書斎などを兼ねた大きな1室空間と、階段を上がった中二階にはゲストルームとして使われている部屋があり、庭に続く土間には英子さんの趣味の置かれていた。公団の団地が、nLDKという、機能を各部屋に割り振り、「寝食分離」の実現を目指す設計であることを考えると、その計画者である津端氏の自宅の間取りがそれとは全く逆のコンセプトで建てられていることに驚いた。そこは賃貸用団地空間ではなく、住宅双六の上がりに位置する、住人のこだわりがデザインされた自由設計の戸建住宅だった。

英子さんの手作りの焼き菓子でもてなしていただきながら、津端家のニュータウンとの関わりについて伺った。お二人の歴史については著書『高蔵寺ニュータウン夫婦物語』（1997）に詳しいが、お話のなかでとても印象的だったのは、津端氏がニュータウンを未来社会を占う壮大な社会的実験

の場であると捉え、理想と熱意をもって歩んでこられた姿だった。その意味では、クラインガルテンを導入した現在のライフスタイルもニュータウンのみならず都市生活者の高齢化が進む中でのひとつの実験的ライフスタイルの実践的提案だといえよう。

#### (5) 公共施設の現在—中央台地区

夕方近くになって、中央台（タウンセンター）地区を見学する。立派な市民センターや大型ショッピングセンターのサン・マルシェがある。ニュータウンの住人たちは車でこのセンターに集まってくるのだろう。その中で、ウエルカム横丁という市民活動のサロンを訪れた。あいにく事務局の方は不在だったが、国際交流やボランティアなど様々な市民活動やイベントのチラシが置かれており、住人たちの交流や情報交換の場であることがわかった。チラシに記された関係者名には女性が多く、「お母さん」たちが主となっているようだ。またこの地区には、1976年にスイミングスクールが、1986年にスポーツクラブがオープンしている。今回のニュータウン訪問中にも、一緒にスポーツをする仲間作りや、仕事帰りの男性同士が世間話のできる数少ない場所だということを目にした。

もう一つ公共施設で印象的だったのが、藤山台地区にある「医者村」とよばれる地区である。ニュータウン建設当初、学校や商業施設と共に医療施設の整備が望まれた。それに応えて、大規模な総合病院ではなく、個人の開業医を一地区に集めたのが医者村である。公団が医院を誘致する形で、1975年には7科医院が開院した。今では閉院している医院もあるが、第二次ベビーブームの子供たちの子育て期には、地元の医院が重要な役割を果たしたに違いない。

#### (6) 地域ネットワークの変遷—押沢台地区

ニュータウンの東南端に位置する自然に

囲まれた戸建住宅地区が押沢台である。1970年代後半から80年代にかけて分譲されたこの地区は、公団分譲地の最後だったという。最近は民間分譲地を購入して入居してくる20代後半から30代の若い夫婦が現れ始めている。彼らは、全体として住人たちが高齢化しているニュータウンの中では貴重な存在だという。

そのようなお宅の1軒にお邪魔した。住宅関連会社にお勤めだという一家の主人が設計した自宅は、全体がカントリー調のつくりとインテリアになっている。入り口が土間になっており、手作りケーキと手作りの陶器が売られている。キッチンが土間に連続していて、土間に設けられた空間は趣味のショップといったところである。現在は夫婦と小さな子供1人であるが、将来を見越して振り分け式の子供部屋が2つ用意されている。キッチンと食堂をつなぐ窓や、部屋のレイアウトなど、随所にこだわりと工夫の感じられる家だった。妻は、庭を使って、仲間3人とケーキ、花、カントリーグッズの市を月に一度催している。手作りのチラシを配布し、楽しみにしてくれているお客さんが大勢いるという。ニュータウンへの転居は、当初の100坪以上という分譲単位が緩和され購入しやすくなり、環境の良さや職場へのアクセスも良いということが決め手になったという。入居後は友人もできて充実した日々だと語ってくれた。

もう1軒、15年以上の居住歴を持つご家族にお話を伺った。子供たちの学校を中心にしたお母さんネットワークと地域のネットワークがつながっていて、フリマに参加するなど様々な活動に忙しいというお話だった。地区行事などの企画も、すぐに何人かが手伝ってくれるなど、声をかければ気持ちよくなるという雰囲気があるという。その取り組みの一つとして、私たちはこの日の早朝、地域行事に参加する小・中高生中心の「雷みかづ鼓」という和太鼓集団の演奏を見学した。ニュータウンの子供の数は

減少しているが、その中でなんとか貴重なつながりを維持しようとするお母さんたちの努力が感じられた。

ただ一方では、かつてはPTAの役員を務める方がたくさんお住まいで通称「PTA通り」と呼ばれるほど活動的だった地域の高齢化が進み、当時の面影が感じられないほど地区の行事などにも消極的になってしまっているというお話もきかれた。ニュータウンは同世代入居の傾向があるため、全体が一気に高齢化していく。住民の高齢化や少子化は、地域のつきあいに様々な変化をもたらしている。

### (7) 再生のための実験—コーポラティブハウス

1995年3月に、ニュータウンに隣接する木附町に、10家族協同の敷地面積として2246m<sup>2</sup>を確保した、コーポラティブハウス「木附の里」が完成した。高蔵寺ニュータウンで私たちが最後に訪問したのは、月1回持ち寄り形式で開かれる「ふれあいパブ」という集まりだった。100本の木が植えられているという共用の庭を挟んで建てられた2棟のタウンハウスのなかで、一番駐車場に近いKさんのお宅が会場になっていた。天井の高い板敷きの広々とした空間に、年齢は様々な20名近い人が集まり、小さい子供たちは嬉しそうに室内を走り回っていた。

集まっていた方々の自己紹介によると、「木附の里」の住人以外にも、高蔵寺ニュータウンの住人、旧来からの地元住人である商店街の店主、建築、NPO関係者などが出席しており、ふれあいパブが地域交流の場になっていることがよくわかった。共通の関心事は、地域づくりや住民ネットワークの充実だった。若い女性たちは子育てマップをつくり、定年退職後の夫婦は高齢者サポートボランティアに参加し、これまで、ニュータウンを寝る場所としてしか考えてこなかった男性たちからは、職住分離

で計画されたニュータウンを、職住接近の場所に変えていきたいという声もきかれた。

たしかに高蔵寺ニュータウンには工業団地用地がある。しかし住宅近接地域であるため、大勢の労働者を抱えるような工場などは誘致できず、雇用人口の少ない研究施設や研修施設しか作れないのだという。ニュータウンを住む場所から、暮らす場所＝ライフタウンに転換していくためには、仕事をどうするか、ニュータウンの外で働く男性たちをどうやってニュータウンに取り戻すかが課題になるのだという議論が交わされた。

自身が設計事務所に勤めるKさんは、自分の家を「木附の里」の集会所のように使える設計にしたと話してくれた。彼は近々会社を辞め、コミュニティ事業を行うNPOを立ち上げる予定だという。将来的には自分の住宅が、高齢者が集い共に食事をするケアセンターのような機能を担うことになるだろうと語る彼の姿には、地域の中で生き抜こうとする決意が感じられた。人々は、ニュータウンをライフタウンにするための新たな市民的ネットワークの構築方法を模索している。

## 5. 未来に挑むニュータウン：幕張ベイタウン、東雲キャナルコート

### (1) 街区型住宅：幕張ベイタウン・パティオス

2002年5月11日朝、私たちが訪れたのは幕張ベイタウンである。千里ニュータウンや高蔵寺ニュータウンとは違い、首都圏のしかも近未来型ニュータウンの見学が目的であった。自ら高層集合住宅設計をてがげる共同研究メンバー篠原聡子氏が調査見学の企画を立てた。

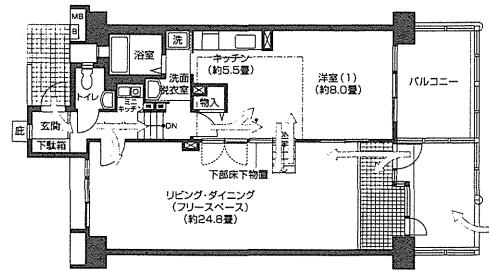
幕張ベイタウンは、新都心・21世紀型国際業務都市として計画された。開発プロジェクトには、千葉県企業庁、都市基盤整備公団、千葉県住宅供給公社、6つの民間事

業者グループ（三菱地所、伊藤忠、三井不動産、丸紅、野村不動産、清水建設）が参加している。

都市全体は、タウンセンター地区、業務研究地区、文教地区、公園緑地地区、住宅地区という5つのゾーンに分けられる。計画総戸数約8,900戸、計画人口約2万6千人の規模をもつ住宅地区は、パリの街並をイメージした街路に沿っておしゃれな中層の沿道型で中庭式の住宅が並ぶ街区住宅（block housing）である。従来の団地や一戸建てがならぶ緑豊かなベッタウンとしての郊外型ニュータウンとは違う形式を目指している。都市の情報や文化と住戸が隣接する、情報消費生活型ニュータウンといえるかもしれない。

住棟の色、形、高さ、屋根の形態などは、「秩序と多様性の共存＝街」というコンセプトにもとづいてデザイン会議により街全体の統一感ができるように決められている。建物のファサードは街の財産と考えられており、街路から見えるところに洗濯物を干すことはできない。どの住棟も外側は賑やかな街路に面しているが、内側は静かな中庭に面している。6番街の中庭は、駐車場の上に人工地盤をつくって緑化し、高低差のある動的なデザインとなっている。8番街は駐車場を地下化することで実現されたフラットな中庭に、季節が映し込まれる静的なデザインをめざしている。街路を歩く人々が建物の開口部やスリットからこうした中庭を垣間見ることができるのも、この街の魅力である。竹をモチーフにした中庭をもつ建物には、ところどころに石の竹の子がデザインされていた。また、街の風景の妨げになる電柱を廃すために、電力や電話などさまざまなケーブルは地下の共同溝にまとめられている。家庭から出るゴミもまた、「ゴミ空気輸送システム」により地下の共同溝内のパイプを通して処理施設に送られる。こうして街は景観を重視して創られている。

図6 2つの玄関のあるデュオ・フロアー住宅  
（都市基盤整備公団 パティオス20番街デュオ・フロアー住宅ガイドブック）



●2つの玄関が作る快適「動線」●

パティオから、ストリートから。2つのエントランスが快適な生活動線を作り、暮らしの幅を広げます。

最初に見学したパティオス20番街の一階住戸は、デュオ・フロアー住宅とよばれる2つのフロアと2つのエントランスをもつ1.5層住宅であった（図6）。街からゆるやかな勾配とほとんど段差のないエントランスで入る約88㎡の下階は、約3.49mという天井高のアトリエ風で開放感がある。ここをパブリックスペースとして開放し趣味の教室や店、アトリエ、ギャラリー、オフィスなど、街とつながりのある使い方ができるという提案がなされている。上階は1.5m上がるだけなのに、その高さによって隣接する下階スペースとの分離感があり、また沿道を少し上から眺める風景によって街からの距離感もできるため、寛げるプライベートスペースとなりそうである。上階下に約10㎡の床下物置が確保されている。

次に見学したのは、パブリックスペースが街路にそって横長に広がる間取りの住戸である。街路との間には共有空間があり、「しとみ戸」をイメージした重さと安定感のある間仕切りで区切られている。フラットプレート工法で梁型のない天井が、天井までの高い開口部を可能にしている。街に開いたオープンな住戸のセキュリティの問題を、どのように解決できるかが課題として残るかもしれない。

メインストリートには、お洒落なカフェや店が散見する。街を歩いていると、高級車が路上駐車する横をハイソな雰囲気を漂わせたマダムが通り過ぎるといった光景にも出会う。住人の年齢層は若いと考えられるが、街角にはシニアクラブ「オアシス」という看板文字もあった。

ベイタウンには二つの小学校と一つの中学校がある。打瀬小学校は、アリーナ棟がある独特の建築で、廊下と教室を分ける壁もなかった。教室も校庭も、街にむかって開かれている。小学校の独自の教育方針が、その建築にあらわれているかのようであった。

街では、住人たちの自発的な発案でさまざまなイベントが行われている。私たちが訪ねた日、街ではちょうど住人フェスティバル「ベイタウン祭り」が開催されていた。通りにフリーマーケットや屋台がでており、メインストリートの美浜プロムナードを、きちんと訓練され、衣装をそろえ、きれいに化粧をした子どもたちのバトン行進が進んでいった。傍らの通りには高級車の展示コーナーがつけられ、セールスがおこなわれていた。住人のネットワークづくりは、このフェスティバルに出される住人活動の紹介と勧誘のためのブースで積極的につくられている。すでにお話会、サッカークラブ、合唱団などがあるという。クリスマスには街全体にイルミネーションが飾られ、住棟の中庭のイルミネーションの美しさが競われるという。

幕張ベイタウンは、東京という巨大都市の延長上に形成された、未来を先取りする小都市である。それがパリという外国の古都イメージのもとに創られなくてはならなかったのは、なぜなのだろう。パリの街から猥雑さを消去し、その記号的なイメージだけを消費するニュータウンでの、日用品のショッピングは、フランス系の郊外型巨大スーパー「カルフル」で行なわれる。まだ建設途上で入居が完了していないため

に街路が閑散としている。そのせいか、ヨーロッパと日本、都市と郊外が共存する、どこにもない、しかし、どこかにあるような不思議なテーマパーク的空間が形成されていた。街角に突如あらわれたマリンプルーの壁の一面が、そこだけ街の秩序を崩しながら、どこかほっとするような光彩を放っていた。

## (2) 公団の挑戦：東雲キャナルコート

2002年5月11日午後、東京駅から南東5キロに位置する東雲地区に建設中の東雲キャナルコートを見学した。

東雲地区は、東を巽運河、西を晴海通りに面したウォーターフロントエリアで、東西約300m、南北約500m、総面積約16haの規模である。地区全体は、運河ゾーン、中央ゾーン、晴海通りゾーンという3つのゾーンからなる。東南の運河ゾーンには、三菱グループが2つの超高層民間マンションを建設中である。西北の晴海通りゾーンにはイオングループの大型商業施設が計画されている。運河沿いには、大規模な都市計画公園が整備される予定である。

中央ゾーンには、都市公団と6つの建築家チーム（山本理頭設計工場、伊藤豊雄建築設計事務所、隈研吾建築都市設計事務所／アール・アイ・エー、山設計工房、ADH/WORKSTATION設計共同体、元倉真琴・山本圭介・堀啓二設計共同体）のコラボレーションによる総戸数6000戸のデザイナーズ賃貸住宅『CODAN』が建設される。デザイナーズ賃貸住宅『CODAN』は、住み方や暮らしに対する価値観が多様化する時代に合わせて、従来の「LDK発想」から脱し、住む人の「自分らしい暮らし方」を実現するために住宅が応えるというコンセプトを提案している。

中央ゾーンは外周道路に囲まれ、中央を車両通行禁止のS字型の街路（S字アベニュー）が横切る。外周道路とS字街路を4つの緑道が結び、S字街路と緑道の交差点

が憩いの広場となる。これらの街路で区切られた6つの街区のそれぞれを、6人の建築家が担当する。街区の建物は10階建てが中心で、中庭がS字街路に誘い込む住棟、足下ピロティーで中庭とつながる囲み型住棟、ブライング・コリドールのある住棟など、それぞれの建築家の特色が活かされている。S字アベニューに面した各街区の低層部には、さまざまな店舗（スモールオフィス）やオープンスタイルの託児施設といった生活支援施設、アーティストレジデンス、ギャラリーなどが入る。それによって「住む」「働く」「楽しむ」24時間の生活がサポートされるという。

住棟の容積率は350%であるが、コミュニケーション・アトリウムとよばれる巨大な吹き抜け空間が設けられることで圧迫感は一減されている。窓側に大きな開口部をもつ開放性のあるコモントラス、街路から4層の広場階段を介して重ねられ3階から住棟に入るコモンプレート、インナーバルコニーなどの共用部分が住人の交流空間を形成し、外部空間の「賑わい」や「緑」を生活空間に取り込んで積極的に活用できるよう計画されている。2街区の住棟にはガーデニング・スペースとしての景観テラスがあり、外部空間を取り入れた居室となるとともに、窓から緑を臨むリズムある景観をつくる。

私たちは東雲キャナルコート的设计計画の説明を受けた後、山本理顕設計のサンルーム型水廻り付住宅とfールーム付住宅（ホワイエルーム）のモデルルームを案内していただいた。サンルーム型水廻り付住宅は、バスルームやキッチンがバルコニー側にある。開放的なサンルーム型のバスルームと寝室の境もガラス張りで、間取りでいえば1LDKの住戸全体が大きな明るい一室のような印象を与える。入り口はすりガラス張りで、住人たちの共有部分である廊下と連続している。クリエイターやイラストレーターなど在宅ワークの単身者にと

って魅力的であるばかりか、介護を必要とする高齢者にも便利な設計と考えられる。まさにどう住むかが、住人の手に委ねられた住戸である。事業主の入居が可能となることにより職住分離だったニュータウンの性格が大きく変わろうとしている。設計上は鉄の扉の廃止、中廊下の採用が画期的である。さらに中廊下の幅がもっと広がれば、使用方法の幅も広がるのではないかという印象を受けた。

fールーム付住宅は、一室がガラスで仕切られてコモントラスに大きく開いている。そこを、趣味サークルの集まりの場、プレイルーム、在宅ワーク、ホームパーティースペース、ギャラリーとして活用することができる。コモントラスによって中廊下が光あふれる空間となる。fールーム付住宅の住人と中廊下を共有する住人の交流が成功すれば、楽しいざわめきのある生活空間が形成されるかもしれない。

東雲地区全体がまだ着工段階であるため、未来志向型ニュータウンが実現したところを実感するのは難しかった。建築家による意欲的な住宅設計は、住人にも積極的な空間利用への参加を期待している。住居空間の一部を街区景観に提供する覚悟がある。これまでのように閉鎖的なプライベート空間としての住戸を求める住人には少々辛いものがあるかもしれない。多様な生活スタイルに応じた多様な住戸スタイルとは、多様な住人層を前提とすることになる。共稼ぎ夫婦や高齢者など地区活動と結びつきにくい世帯が混住する場合、明るく美しい街区景観は保持されるのだろうか。ガーデニング・スペースがきちんと手入れされた緑に埋まり、コモントラスに面した住戸空間が物置で占領されることなく、誰もが開かれた共用空間をエンジョイするためには、どのような住人のサポート・ネットワークが必要かが、改めて問われることになりそうである。

## 6. 「日本型ニュータウン」の現在

この共同研究による日本各地のニュータウンの調査をすすめるなかで、私たちは「ニュータウンの人類学」の可能性について考え続けた。文化人類学に特有の、直接的できめの細かい聞き取り調査、協同の営みに加わりつつする参与観察という研究方法は、計画主体の側から取り組まれたり、ニュータウンの病理を扱ったりすることの多かった従来のニュータウン研究に不足する、住む主体である住人の内側からの視座を中心に据えることを可能にするのではないか。また、文化人類学が学問的基盤の一つとする比較文化研究で培った複眼的な視点も、ニュータウン研究に有効であると思われる。

日本各地のニュータウンは、70年代までの公団住宅の多くが標準設計にもとづいて建設されたこともあって、互いによく似た外観を呈し、共通する問題をかかえながらも、地域差は予想以上に大きい。ニュータウンからニュータウンへと旅しながら、ニュータウンを文化人類学のフィールドとして捉えなおす過程で明確になってきたのが、「日本型ニュータウン」の特徴と問題であった。

各地のニュータウンは立地条件と建設時期とにより、性格を異にしている。首都圏は拡大する一方であり、開発の時期は都心からの距離が延びるほど新しくなる。地方都市においても膨張する人口を収容するために計画されたニュータウンは、そのニュータウンが依存する、労働の場である旧都市それぞれの性格を反映する。たとえば高蔵寺ニュータウンは名古屋市に通勤するサラリーマンのベッドタウンであるが、名古屋には多数の企業の支社がおかれているため、多くの通勤族の出発点、終着点であるだけでなく、通過地点となり、ニュータウンへの流入と流出のバランスが比較的良

好である、などである。

また、各ニュータウンには最初に入居した世代の刻印が残る。松戸市の常盤平新都市と、幕張ベイタウンとでは建設時期にほとんど40年の差がある。たまたまいの違ひからして、住人の生活文化は大きく異なるものと推測される。集合住宅のデザインも時代によって変化する。常盤平の場合は、そろって南面に標準設計が並ぶ棟が林立する。幕張では、デザインの多様性が追求され、色彩も豊かで、高層化はよりすすんでいる。棟は中庭（パティオ）を囲んで建てられており、南面一辺倒であった団地方式を意図的に壊す努力がされているように見えた。

公団の説明では、幕張ベイタウンはパリの町並みがモデルということであるが、どのニュータウン計画にも、それぞれちがう欧米のニュータウンの名前がモデルとしてあげられているのが印象的であった。だが日本列島のニュータウンは、欧米のモデルやコンセプトに忠実というわけでは決していない。千里ニュータウンと交流があるとされるパリ近郊のセルジイウワシイの駅前風景やモールは、千里中央の風景に似ていなくもない。しかし建設時期はそれほどちがわないのに、現在人口の年齢構成がちがっている。千里ニュータウンの方に高齢化がみられる。

このようにモデルの違い、地域性、建設時期のずれから、日本各地のニュータウンはそれぞれ固有の問題をかかえ、個性的である。しかし見学をひととおり終えてみると、さまざまな違いにもかかわらず、日本のニュータウンに共通する特徴が浮かび上がってきた。それを以下に「日本型ニュータウン」の特徴と問題として整理することによって、共同研究後半の着眼点をはっきりさせ、本共同研究の中間報告に代えることとしたい。これは、ニュータウンの国際比較を視野に入れた将来に向けての基盤研究の一環でもある。



### 1) 職住分離の原則

欧米の多くのニュータウンは最初から産業誘致が計画のなかに組み込まれていた。先にふれたパリ近郊のセルジイの人口構成が若いのも、労働力の回転があり、引退後の高齢期には別の土地で田舎暮らしをするという計画を持つ人が多いことにも起因している。日本にも高蔵寺ニュータウンのように、計画時には産業誘致が議論されていたニュータウン計画もあるにはあったが、計画どおりの実現はなかった。日本の場合は高度経済成長期に急増する都市人口を収容する住宅の建設が急がれた。

けっきよく大都市、のちには中核都市の郊外につくられたニュータウンの機能は、ベッドタウン、そして子育ての町として計画された。生産活動は旧都市で、再生産活動は新都市で、という分離原則であり、そこにジェンダーの振り分けがされていた。ニュータウンの昼間人口の絶対多数は女、子ども、多くの男性はほとんど睡眠時間だけをニュータウンで過ごすパートタイマー住人という暗黙の前提があった。ベッドタウンとしての機能を明確にするニュータウンは、周囲の古くからある地域とは異なる特徴をもつ。

### 2) 共用空間と共同性

エレベーターのある高層集合住宅は片側廊下が多かった。1つ1つの住戸にある鉄の扉を開けると、廊下はほとんど屋外と意識されている。とくに賃貸住宅棟のばあい、ゴミ集積所、自転車置き場などに問題が集中して発生していた。児童公園のように当初から計画にあった共用空間には人影がまばらである。ニュータウンは1戸1家族が原則の都市であるから、生活は住戸単位で完結し、住戸を外へ開く必要性が少ないのではないか、と思われた。その完結性が破綻したときには、問題は深刻化し、完結性が閉鎖性という否定的な性格を帯びる。

他方、街路や広場に、ニュータウン内共

用空間という性格をこえた、万人のものという観念＝外へ向かって開かれた公共性があるか、と言えば、この点も中途半端なのではないだろうか。賃貸と分譲、集合住宅と戸建て、といった街区ごとの分断もまた、住人たちが広場を共有することをさまたげている。

しかし、家族単位で構成されていたニュータウンに、孤老の独居、あるいは単身世帯、母子・父子世帯が増加するにしたがい、さまざまなネットワークが必要とされはじめている。定年直後の元気な高齢者、この場合とくに男性、が全日制住人となり、市民活動に参入、従来の市民活動のすべてを担ってきた女性たちとのあいだである種の文化摩擦をひきおこす。あるいは昼間のニュータウンの活性化に貢献している、といった変化もみられる。「私」から編み上げる「共同性」そして新しい「公共性」は目に見えないが存在する。住人も部分的にしき気づいていないさまざまなネットワークの存在を、住人に協力しながら可視化することは、私たちの共同研究の課題の一つである。

### 3) 階層分離

日本のニュータウンは松戸の例でみたように、本来、新中間層のための新都市計画であり、フランスに典型的にみられるような低家賃住宅群として設計されてはいない。しかし賃貸住宅に入居した後は分譲へ、分譲から戸建てへという住宅双六がニュータウンに組み込まれている以上、階層分離は進行し、各段階において、残留人口が増えるか、そうでなければ空き部屋現象が増えてゆく。

それぞれの「タウン」、「シティ」がランク付けされ、高級住宅地は武装したガードマンで守られるといった形をとって表れるアメリカの場合や、あるいは外国人労働者の囲い込みとなっているフランスに見られる場合とはちがい、日本型ニュータウンの

場合は1つのニュータウン内での階層分離がむしろ隠微な形で、しかし、早い速度で進行している。

だがこれは階層分離という一億総中流意識が言われた高度経済成長期後の日本社会全体で起こっていることが、ニュータウンでは一足はやく、しかもより先鋭化した形で表れているにすぎない。ニュータウンの主婦たちはさまざまな形で就労して家計補助を担っており、労働力市場に組み込まれている。また、ニュータウンで生まれ育った次世代の就労状況は大きく変わっている。家族扶養賃金体制そのものが変わりつつあり、家族賃金から単身者賃金への移行の影響は、同居家族の内容から地域のあり方までをも変化させてゆく。

#### 4) 急激な高齢化と少子化

それぞれのニュータウンの個性は、最初の入居者の世代の動向が決めるところが大きい。同世代の一斉入居があった以上、どのニュータウンも一斉に高齢化を迎える道理である。定住化に成功すればするほど、高齢化問題が発生するという結果もある。高齢化問題は、ニュータウン住宅双六の最初と最後の段階に集中している。

たとえば、もっとも初期の家族用設計であった2DKは、夫婦のみ、あるいは単身となった高齢者の快適な住空間に改造する、あるいはそのまま使いつづけることができる。しかし棟全体の問題としては、ある時期からは自治会その他の社会活動上の機能麻痺、介護問題の深刻化が発生している。

他方では、住宅双六の上がりである丘の上に白く輝く庭付き一戸建て住宅には、高齢者が夫婦あるいは単身で住み、急勾配や階段のために日常生活に支障をきたしている。また防犯に不安を感じている例も少なくない。

ニュータウン内では小学校、中学校の規模縮小がある一方で、高齢者施設の新設、増設が急がれている。これらの施設の設置

は、ニュータウン内における新しい職域の開発にもつながっている。介護保険制度が発足したように、高齢化は社会全体の問題である。ニュータウンの住戸設計および都市計画には組み込まれていなかったらう高齢化問題は、家族の住まい単位で構成されていたニュータウンを大きく変える要素といえる。

#### 5) 多文化混雑社会の可能性

ヨーロッパのニュータウンには最初から民族問題がつきまわっていた。外国人労働力を必要とした経済構造、戦後賠償や旧植民地問題などの政治問題がニュータウン建設の前提にあったからである。

だが、日本の場合は、公団住宅の入居条件に長いあいだ、日本国籍を有することという項目があった。国民住宅概念が尾をひいていたといえよう。新中間層の住空間として構想されたニュータウンにも、健全な国民の養成という使命が負わされており、外国人問題は建前の上では存在しないことになっていた。だが、企業がブラジル移民の二世、三世を正式に雇用し、事業主が借主となる集合住宅に入居させる例、中国残留孤児の家族が公営住宅に入居するなど、現実には日本に新しく居を定める人たちが、職場との距離や家賃などさまざまな理由でニュータウンへの入居を始めている。

グローバル化により、世界中を移動するのはモノとカネだけではない。労働力が世界市場をひろく移動する傾向は年々高まっている。移民の問題だけでなく、各地の紛争のたびに発生する難民の国際移動もある。世界のニュータウンからニュータウンへの人口移動が起こっており、日本列島もまたその労働力の循環から無関係ではいられない。そのとき、ニュータウンは社会全体に先駆けて、異文化接触の多い空間となり、そこから混雑文化が発生する可能性がある。私たちは、ニュータウン問題から、このグローバル規模の人口移動につながる変動に

も注目したいと考えている。その時、文化人類学の視点と方法を備えたニュータウン研究へのアプローチはかなり有効になるに違いない。

私たちの共同研究は、ジェンダー振り分けの傾向が強く、階層分離が進行し、異文化の棲み分けがあつて、分断されたニュータウンの研究に着手した。分断／交信／関係性といった問題を従来の問題指摘型の研究としてではなく、希望の芽をみつけ育てる方向を持つ研究として進めてゆきたい。

#### (謝辞)

本論文は、冒頭にも示した通り、文部科学省の科学研究費助成による基盤研究(C)(2)「ニュータウンにおけるジェンダー変容」、(研究代表者：西川祐子、平成13年度～15年度、研究機関名：京都文教大学、研究分担者：遠藤央、杉本星子、鷓飼正樹、森正美(以上、京都文教大学)、豊田洋一(中部大学)、篠原聡子(日本女子大学))による研究成果の中間報告にあたる。研究実施に際しては、多くの方々にお世話になっている。本論文に関する調査研究については、とくに松戸市立博物館学芸員山田尚彦氏、青木俊也氏、また都市基盤整備公団技術監理部設計課長井関和朗氏、株式会社都市整備プランニングの佐藤武信氏、津端修一・英子ご夫妻、コーポラティブハウス「木附の里」の皆様には、大変お世話になった。また千里ニュータウンの調査に際しては、豊中市政研究所および伊東康子氏にお世話いただいた。ここに記して感謝いたします。

#### <参考文献および資料>

青木俊也 2001 『再現・昭和30年代 団地2DKの暮らし』 河出書房新社。  
上林一英 1996 「幕張ペイタウン・パティオス8番街」『新建築』1996年5月号, pp.149-154。  
大坪昭・吉田良太編 1998 『住総研50年史』、住

#### 宅総合研究財団

小沢明 1996 「街区に住む：敷地主義・団地主義からの脱却」『新建築』1996年5月号, pp.156-157。  
1996 「M1・M8街区の都市デザイン方針」『新建築』1996年5月号, pp.155。  
高蔵寺ニュータウン開発事業に係る事業記録編集委員会編 1981 『高蔵寺ニュータウン - 20年の記録 -』日本住宅公団中部支社  
住宅・都市整備公団10年史刊行事務局編 1991 『豊かな都市とすまいを求めて 住宅・都市整備公団10年のあゆみ』、住宅・都市整備公団  
住宅・都市整備公団中部支社 1998 『トピカ』 Winter  
篠原聡子・大橋寿美子・小泉雅生・ライフスタイル研究会(編著)2002 『変わる家族と変わる住まい - 自在家族 - のための住まい』彰国社  
隔月刊インテリアマガジン「コンフォルト」5月増刊 2001 『図説 日本の「間取り」』建築資料研究社  
高橋公子 1990 「戦後集合住宅平面計画の変遷」『カラム』48-54  
千葉県企画庁 Designed Town, Makuhari Baytown中部大学豊田研究室編 1988 『高蔵寺ニュータウン 建築ガイドマップ個性あるまちへ』  
中日新聞 1995(平成7年)4月28日(25面)「木附の里」関連記事  
筑波大学小場瀬研究室作成 1999「暮らしの100年年表」、『建築雑誌』、12月号、日本建築学会  
津端修一・英子 1997 『高蔵寺ニュータウン夫婦物語』ミネルヴァ書房  
寺内信 1992 『INAX ALBUM 7大阪の長屋／近代における都市と住居』INAX出版  
都市基盤整備公団 「賃貸住宅ストックの再生・活用リニューアル事業」パンフレット  
都市基盤整備公団 「パティオス20番街 デュオ・フロア住宅ガイドブック」  
都市基盤整備公団 東雲チャンネルコート・プロジェクトガイド  
都市基盤整備公団 東雲チャンネルコート設計資料  
都市基盤整備公団中部支社 パンフレット  
「039春日井市 藤山台団地」  
都市基盤整備公団中部支社 パンフレット  
「071春日井市 岩成山西団地」  
都市住宅学会 1997 『都市住宅学』、第18号、都

## 市住宅学会

- 中井検裕・村木美貴 1998『英国都市計画とマスタープラン—合意に基づく政策の実現プログラム』、学芸出版社
- 西川祐子 1998『借家と持ち家の文学史—「私」のうつわの物語』三省堂  
1999—2001「部屋の文化研究1～8」、  
『10+1』、18—25号、INAX出版  
2000『近代国家と家族モデル』、吉川弘文館  
2001「「私」の居場所／居方」、『思想』、  
2001年6月号第925号、岩波書店  
2002「ニュータウンのジェンダー変容」『TOYONAKAビジョン22』  
vol.5  
2003「ニュータウンからの問い」、『現代思想』、2003年1月号、(31—1)  
青土社
- 西山卯三 1947『これからのすまい』、相模書房版
- 西山八重子 2002『イギリス田園都市の社会学』、ミネルヴァ書房
- 日本建築学会近畿支部住宅部会編 1993『関西の住宅地』、日本建築学会近畿支部住宅部会
- 日本住宅協会編『昭和の集合住宅史』、日本住宅協会、
- 日本住宅公団20年史刊行委員会編 1981『日本住宅公団史』、日本住宅公団
- 久武綾子・戒能民江・若尾典子・吉田あけみ  
1997『家族データブック 年表と図表で読む戦後家族 1945～96』、有斐閣
- 福原正弘 2001『甦れニュータウン—交流による再生を求めて—』、古今書院
- 布野修司編 1995「日本の住宅戦後50年 21世紀へ—変わるものと変わらないものを検証する」、『建築文化別冊』、彰国社
- 松村秀一 2001『団地再生 甦る欧米の集合住宅』、彰国社
- 湯沢雅彦 1995「戦後家族問題年表」、『図説 家族問題の現在』、日本放送出版協会

**ABSTRACT**

## Exploiting the possibilities of an 'Anthropology of New Towns'

Yuko NISHIKAWA, Seiko SUGIMOTO, and Masami MORI

This is a midterm report of the joint project work "Changing Gender Roles in New towns in Japan" with a grant in aid of research from the Ministry of Science and Education, Japan, from Apr. 2001 to Mar. 2004 (Representative: Yuko Nishikawa, Kyoto Bunkyo University). The project aims to investigate the remarkable and dynamic social changes to be observed in new towns today and, at the same time, to exploit a new arena of research of new towns by introducing the views and methods of Anthropology.

The new towns of Japan were designed as "dormitories" around mega cities chiefly for 'the modern families', which were composed of white-collar workers, full-time housewives and their children. However, the recent social changes brought about by various factors, especially by the collapse of the wage system based on lifetime employment and on a family allowance, the rising numbers of employed women and the arrival of an on average much older society, has led to a disjunction between the "containers", well-planned and ordered towns, and the "contents", the actual inhabitants. And the modification of gender roles in the modern family has prompted an incipient remodelling of human relationships in these communities, which has the potential to alter the whole society drastically.

Chapter 1 presents the significance and the outlook of the project. Chapter 2 focuses on the history of housing policy and the development of new towns in Japan, through which we will clearly set out the historical and functional and geographical positions of four new towns which we have visited during these one-and-a-half years. The stage is thus set for the following three chapters which embody our observations of new towns: Chapter 3 is on Matsudo-Tokiwadaira Danchi, which was designed for a new middle class in the early days of new towns, while Chapter 4 details the survey of Kouzouji New Town nowadays, more than thirty years after its construction. It is shifting from a town for transient dwellers to one for permanent residents. Chapter 5 focuses on Makuhari-Patios and Shinonome Canal Court, which were planned in accordance with quite new concepts as a challenge to the society of the future.

Chapter 6 concludes by examining the findings of the project. Via investigation of documents and field researches shaped by anthropological viewpoints and methods, especially from the standpoint of comparative cultures and with the practices of participant observation, the regional differences and common features among various new

towns in Japan became clear. Finally, we discuss following five prominent features of 'the Japanese type of new towns'. Firstly, most of them designed in the early period were developed following the concept of the geographical separation of residential areas from working areas. This feature was based on and at the same time contributed to reinforce the differentiation of gender roles, males as workers and females as housewives. Secondly, the common spaces of new towns, for example parking spaces of bicycles and parks, are all inside the residential areas and monopolized by the patently finite number of their inhabitants. And those common spaces often appear as the settings for various conflicts or tensions among them. Thirdly, the social stratification among inhabitants is becoming more and more obvious in new towns. Nowadays we can find in a new town a division between rented flats occupied by many of the older and relatively poor residents, and which have plenty of vacancies, and those sold in lots occupied by rather wealthier residents. Fourthly, the characteristics of the greying society emerge remarkably in contemporary new towns. Because of the rapid increase of the percentage of older people and the decrease in the number of children, there is pressure to establish various institutions for the elderly, while schools are being down-sized. Finally the number of inhabitants of foreign origin is increasing in new towns after the dropping of the rule which had long debarred tenants without Japanese nationality. This is beginning to change the human landscapes of new towns substantially. Japanese new towns are thus playing their part in the movement of labor between countries. We must now put our minds to how best to develop multi-cultural or hybrid communities. The studies of new towns from the anthropological perspective also need to contribute effectively in that respect.